

# はくぶつかんネット

## 第83号

令和7年8月～10月号  
発行：宜野湾市立博物館



### 小中学校連携展 第33回ぎのわんの文化財図画作品展

「食欲の秋」、「スポーツの秋」、秋にも色々ありますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

市立博物館では、10月4日(土)から19日(日)まで、「芸術の秋」にぴったりの「ぎのわんの文化財図画作品展」を開催しました。本企画展は、子どもたちの豊かな表現力を養うと共に、宜野湾市の歴史や文化財への理解と関心を高め、愛郷心を育むことを目的として毎年開催しているもので、市内の小中学生が描いた文化財にまつわる図画作品を展示しています。第33回を迎えた今年度は、小中学校合わせて143点の力作が集まり、展示室を華やかに彩りました。

開催初日の4日には、教育長賞から銅賞に選ばれた児童生徒の皆さまを称える表彰式が行われ、伊波保勝教育長から受賞者に表彰状と副賞が授与されました。

子どもたちの豊かな感性とアイディアで描かれた作品は写真とも異なった魅力があり、2週間という短い展示期間ながらも、1,028人の方にご観覧いただくことができました。

改めまして、ご来館いただいた皆さま、審査にご協力いただいた先生方、そして作品を描いてくれた児童生徒の皆さんに、心より感謝を申し上げます。

**受賞おめでとうございます!!**

#### 表彰式 展示の様子





# 教育長賞 受賞作品



「我如古ヒーヤーガー」

永吉 希一(志真志小学校)



「はごろも祭り」

田里 柚乃(嘉数小学校)

左:小学校中学年(3・4年生)の部  
中央:小学校高学年(5・6年生)の部  
右:中学校の部



「普天満宮」

高里 笑梨(嘉数中学校)

## 審査員 コメント

市内小中学校の図工・美術の先生方に審査員をお願いして、各賞の選考をしていただきました。  
先生方からいただいたコメントの一部をご紹介します。



### 小学校中学年(3・4年生)の部

中学年の部は、色の使い方が全体的に上手くできており、塗り残しも少なく細かいところまで丁寧に描かれています。折り紙や重ね塗りなど独自の工夫がなされている作品も多く、見ていて面白さを感じさせます。

自分の住んでいる地域の文化財を大切にしている様子が絵から伝わってきて、文化財の新しい魅力を引き出しているところが素晴らしいと思います。

### 小学校中学年(5・6年生)の部

高学年の部は、5・6年生ということもあり、対象が正確に細部まで描き込まれています。また、構図を工夫することで奥行や迫力を感じさせる作品や、スパッタリング等の技法を用いて描いたものもあり、様々なアイディアで見るものを楽しませてくれます。

古くから伝わる文化財を題材にしていますが、どこかポップで今の時代ならではの感性で描かれた作品が集まりました。

### 中学生の部

どの作品も本物に近づけようと自分なりに試行錯誤しているのが見て取れ、好感が持てました。木々や石、水など、同じような色の中から微妙な色の違いを感じ、陰影や素材のディテールなどの細部までこだわって表現していました。その中でも上位入賞者は、よりリアルに自然に色や空間を表しており、特に水の表現には技術の高さを感じました。

来年のご応募もお待ちしています!!





# 夏休み こども博物館教室を開催しました



8月に小学校3年生～中学3年生までの児童生徒を対象に「こども博物館教室」を開催しました。こどもたちに夏休みの自由研究のお手伝いとして、また、学習の場としての博物館活動の充実を図ることを目的として毎年開催しています。今年度は、全3回で合計62名の皆さんにご参加いただき、沖縄の歴史や文化、自然について、モノづくりをしながら楽しく学んでもらいました。

## 第1回 漆喰(しっくい)シーサーをつくろう！

8月2日(土)実施

中城村にある“和仁屋しっくいシーサー振興会”的先生方にご指導いただきながら、赤瓦のカケラと漆喰を使って自分だけのオリジナルシーサーを作りました。「目や鼻をつくるのが楽しかった！」「足のところが難しかった」「しっくいで形をつくるのが楽しかった」など、それぞれの個性を発揮したシーサーを作りながら、沖縄の伝統文化に触れる機会になりました。



## 第2回 土人形(つちにんぎょう)をつくろう！

8月14日(木)実施

土ねんどを使って、琉球玩具のひとつ「土人形」を作りました。形を作った後は、アクリル絵の具で人形に色を塗って、それぞれ思い思いの人形を完成させていました。「ねんどがいろんな形に出来て楽しかった」「色をぬるのが楽しかった」「水につけながら作るのが楽しかった」など、土人形を作りながら沖縄の伝統行事「ユッカヌヒー」についても知る機会になりました。



## 第3回 葉っぱでおもちゃをつくろう！

8月18日(月)実施

アダンの葉っぱを使って、昔の人たちが作っていた「葉っぱのおもちゃ」を作りました。「カタツムリ」「エンゼルフィッシュ」や、難しい「指ハブ」も作りました。「葉っぱでいろいろ作って楽しかった」「たくさんできた」「最初は難しかったけど完成してよかった」など、おもちゃを作りながら、身近な植物についても知る機会になりました。



# 市史だより がちまやあ Gači-majaa

## 職業の変化



今年度の「がちまやあ」は、宜野湾村から現在までの80年の変化についてお送りしています。今回の第2回「職業の変化」では、村民が就いた仕事や職業の変化について見ていきます。村民は戦後になると各自の住環境を整えつつ、生活を安定させるために働きました。基地建設による影響で、農業を再開できた地域と、米軍に関わる仕事を行う都市地域が形成されていきました。復帰前後には、農業地域が新しい農業や産業に取り組む一方で、都市地域は社会情勢左右される生活で、不安や苦労の連続でした。こうした「職業の変化」について、アメリカ世と本土復帰前後で主なトピックを取り上げ、変化を見ていきたいと思います。

### 軍作業で働く日々

1945年戦闘の最中に捕虜となった村民達は、本島中・北部の収容所に集められました。労働の見返りとしてもらえる配給物資のために女性や子どもも体が丈夫な人は、積極的に軍作業に出ました。

帰村が許可され、普天間や野嵩で生活していた頃の軍作業は、米兵のトラックに乗せられて道路整備、戦死者の遺体処理などを行うこともありました。

1945

1946

### 米軍施設を中心に広がる基地の街

1946年6月には配給も有償となり、元居住地に戻れた人や戻れずにいる人達も、その場での住環境を整えつつ、仕事に就き始めました。

米軍施設が集中していた村においては、AJカンパニー（普天間が拠点の米国の建設会社）の軍カンパン（軍従業員の給食・宿泊施設）で働く人が多くいました。ピーク時の1947年12月末には2,252人が住込みで働いており、本島北部の本部町や大宜味村出身者などが多くいました。新普天間（現普天間二区）一帯では軍で働く人が住み始め、自宅屋敷の一部を下宿屋として貸し出す人や、「洗濯サー（民間で米兵衣服の洗濯を請負う人）」も出てきました。軍で働く人向けの商売は、米兵相手にも広がりをみせ、飲食店などを営む人も出て、次第に普天間一帯は都市化が進みました。



▲米軍人の遺体は現在の伊佐三叉路付近の敷地に仮埋葬されました。1946年頃（伊佐）



▲戦後も農業を行っていた長田・志真志では、こうした行商の姿もありました。1950年代（長田）



▲メスホール（普天間大食堂）ではAJカンパニーで働く従業員3,000食をまかなっていました。1950年代（普天間）

### 軍作業での経験を活かした仕事

軍作業で働く人達の中には、仕事で得た知識や経験を活かして働く人も多くいました。自然に覚えたウチナー英語を使って米兵家族と仲良くなり、商売の収入幅を広げる者や、仕事で得た自動車運転免許を活かし、個人タクシー業を始める者などもいました。その後の人生においても、軍作業で得た経験は、大切なものとなりました。



▲米兵家族の身のまわりの世話や子守りなどをしたハウスメイドは女性に人気の職業の一つでした。

（年代・場所不明）

### ▼移民帰りの人の活躍

ハワイなどの移民帰りの人は、戦中や戦後直後において村民の困難な状況を幾度も救いました。野嵩収容所では、米兵と意思疎通ができない村民のために通訳をし、軍作業員を振り分ける仕事を務める人や洗濯係の班長として指揮をとる人もいました。元居住地へ戻った頃の嘉数では移民先での経験から花の栽培方法を人々に教えた人達がいました。そのおかげで嘉数では、花木栽培が盛んになり、男性は花を育て女性は花売りで収入を得るようになった家もありました。

### 農業と軍作業を兼業する生活

1950年12月には産業別の就業先は農業2,884人、公務（軍作業員）2,889人に集中し、この2つで就業人口の83%を占めていました。戦後、農業を再開できた人の中には、家族の食事分が精一杯で農業主体の生活ができない人が多く、彼らは軍作業を兼業する生活をしていました。また、元々農家であっても農地を奪われて農業ができない人や、元々農地を持っていない人もおり、彼らは慣れない軍作業で働くしかありませんでした。



▲米兵らの立入許可を証明する「A サイン」の基準には、トイレなどの衛生面も含まれており、米兵相手の店などは多額の費用をかけて改修しました。（撮影時期不明）

1950

### ▼本土復帰への兆し

米兵相手の商売は新普天間を中心にぎわい、住宅を売る仕事や、建築業などで基地の街として発展してきました。しかし、過度に基地経済に依存している状況から、治安や衛生環境が悪いという理由で、特定地域に対してオフリミット（立入禁止令）が下されると、米兵らの立入禁止で客が来なくなり、店側は営業停止を余儀なくされました。こうした中、米兵相手の商売や雇用関係でのトラブル、米兵がらみの事件や事故などをきっかけに労働運動が起り、次第に復帰運動へと続いていました。

1965

### ▼村外出身者の転入

出身市町村への移動と引揚が落ち着き始めると、1950年以降には軍作業の職を求めて奄美大島・宮古・八重山などの転入者が移り住み始めました。彼らの住居は、米軍施設のある1号線（現国道58号）沿いの西側（伊佐・大山・宇地泊・大謝名）や、5号線（現国道330号）沿いの野嵩・普天間・新普天間などにも多くありました。このような傾向から、徐々に村の人口も増え始めました。

### 田芋栽培の始まり

宜野湾村は1962年には「村」から「市」に昇格しましたが、農業人口は年々減少していく傾向にありました。市内でもキビ栽培を中心の中、1960年代に入ると新しい動きを見せ始め、「都市型農業」として農業や畜産業に力を入れた取り組みをするようになりました。

1965年9月には大山や大謝名、伊佐では戦前から栽培が盛んだった水稻から換金作物になる田芋の切り替えに成功しました。田芋は米作に比べて労力が半減し、利益も約5倍になるため、田芋の面積も増え始めました。田芋は正月や盆行事になると、コザでは高値で売れ、貴重な現金収入となりました。田芋は次第に宜野湾市の代表する農作物へとなりました。

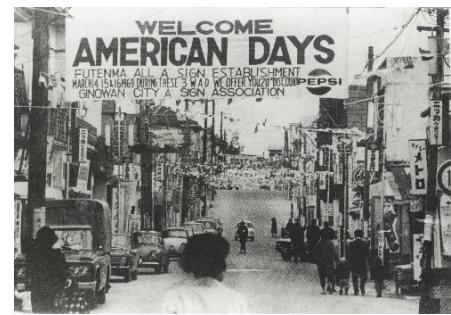


▲産業まつりにて大山産の田芋を販売する様子。縁かつぎ、子孫繁栄にと宣伝しました。  
1968年（新城）

田芋づくりに成功

宜野湾の大山、伊佐地区

▲1965年9月29日  
沖縄タイムス朝刊見出し



▲繁華街のすずらん通りでは、米兵の給料日になると割引の横断幕が掲げられ、にぎわいをみせました。1969年3月（新普天間）

# ココがすごいぞ！シマで生きる道具展

終了しました！

7/19（土）から9/28（日）まで、夏の企画展「ココがすごいぞ！シマで生きる道具展」を開催しました。本企画展は、島で生きるチカラ調査隊と「黙々100年塾蔓草庵」のご協力をいただき、昔のくらしで使われていた道具の紹介や道具の移り変わりなどから、今のくらしを考え、「豊かさ」とは何かを考えるものでした。

期間中は、3,629人に展示をご観覧いただき、「昔見たり、聞いたり、使用した道具がいっぱいあって感動しました」「昔の知らない道具を見て面白かった」「自然の素材を使って、知恵があるな～」「昔の遊びを体験できてとても楽しかったです」など、道具を見て、触って、作ることに多くの感想をいただきました！

また、期間中は関連講座として、黙々100年塾蔓草庵の創始者で、元名護博物館館長の島袋正敏氏を講師とした「作る、使う、直すこと」と題した講演会、島で生きるチカラ調査隊を講師としてヤンバル竹でホーキー、一斗缶でターゲー（水汲み）を作りました。また、不定期で、島で生きるチカラ調査隊による植物を使ったもの作りが行われ、毎回、多くの親子連れの方々などにご参加いただきました！

本企画展でご協力いただいた、島で生きるチカラ調査隊、黙々100年塾蔓草庵、ご来館してくださった皆さん、本当にありがとうございました！

## 見学の様子



## 関連講座・もの作りの様子



今回の企画展では、来館者に「ココがすごい！」と思った道具に投票していただく「道具総選挙」というコーナーを設けていたんだケロ！

次のページでは、投票結果を発表するケロ♪





## 沖縄県指定史跡

### 「野嵩スティバナビラ石畳道」パネル展

いしだたみみち  
終わったやあ！



7月28日（月）～9月28日（日）の期間に当館ロビーにて、文化課主催の「沖縄県指定史跡『野嵩スティバナビラ石畳道』パネル展」を開催しました。今回のパネル展では、「野嵩スティバナビラ石畳道」が今年6月に宜野湾市の指定史跡から沖縄県指定の史跡に格上げとなった、その経緯や最近の発掘調査で分かったこと、地域ぐるみで活用方法を考えるような展示内容となりました。

今回のパネル展では、52日間の会期中に3,209名もの方々にご観覧いただきました。見学者の方からは、「地域の方と文化課とのチームプレイ」と評価していただいたり、「歴史を大切にする他地域との交流の場」になってほしいと願うご感想があり、好評のうちにパネル展を終えることができたと思います。ご観覧いただきました皆さま、本当にありがとうございました！

また、10月半ば頃から12月末までは、WEBパネル展と称して同様の内容をHPに公開しますので、今回の展示を見逃してしまった方は、ぜひチェックしてください！



宜野湾市 HP

# 学芸員実習 2025



8月6日(水)から18日(月)までの11日間、未来の博物館学芸員を目指す学生たちが実習に取り組みました。

博物館のリアルな仕事を体験した学生3名の感想をご紹介します。



授業では得られない“現場のリアル”を毎日肌で感じ、学び、日々成長できたと実感しています。またいつかの機会に宜野湾市立博物館の皆さんと一緒に何かできる日が来ることを期待し、その日までにもっと成長できるよう精進します。ありがとうございました！

（琉球大学 宮城 秀歌さん）

この博物館学芸員実習を通して、学芸員の仕事とは何か、どんな業務をするのか、どんな心掛けをして働くのかを、完璧ではありませんが理解することができました。学芸員の仕事はパソコンや展示だけではなく、市民講座で市民と交流したり、こども博物館教室で子どもたちと交流したりと色々な業務があることを知れたので良かったです。また、既製品を買うのではなく、自分たちの手で今あるものを研磨したり、ニスを塗ったりして直していく作業を体験し、モノを大切にする学芸員の本質を理解することができた気がします。

（沖縄国際大学 濱川 琉太郎さん）

実習は11日間であったが、宜野湾市立博物館の取り組みや業務内容を掴むことができたと振り返る。宜野湾の歴史や民俗、自然などに特化しながらも、教育普及にも力を入れているということが分かり、市民交流の場や地域の理解を深めることができる良い場所だと感じた。学芸員の業務内容としては、初めは資料の収集や保存、展示など、学芸員の代表的な職務内容を行うと想像していた。しかし実際には、会場設営や入口看板補修、展示台作成などの作業を行うことが多く、雑芸員と言われる理由を身を持って理解できた。だが、メインである展示物を引き立てることや講座などを成功させるためには必要な業務であり、無意味な経験はなかったと振り返る。（沖縄国際大学 國吉 淳之介さん）

## 戦後80年企画展Ⅱ 宜野湾 戦後生活史

開催中！

今年は沖縄戦終結から80年目となる節目の関連企画展を開催しています。6月に第一弾として「沖縄戦の中の宜野湾」を終え、続編となる宜野湾の戦後を伝える企画展です。沖縄戦で全てを失い、ゼロからのスタートとなつた人びとが経験した苦悩の歴史を、米軍占領下の時代や日本復帰に伴うさまざま出来事のなかで移り変わつていく宜野湾の様子とともに紹介します。

11月1日(土)～1月18日(日)

●○●関連事業 博物館市民講座●○●

- ①11/8(土)「宜野湾 教育のあゆみ」  
講師:藤波 潔(沖縄国際大学 教授)
- ②11/9(日)「ぶらっと、博物館めぐり  
～うるま市立石川歴史民俗資料館～」  
講師:宮里 実雄(石川歴史民俗資料館 職員)
- ③12/7(日)「戦後のはじまりは野嵩から」  
講師:平敷 兼哉(宜野湾市立博物館 館長)
- ④12/14(日)「戦後沖縄の社会とくらし」  
講師:秋山 道宏(沖縄国際大学 准教授)

●○お問合せは博物館まで○●



即時無条件全面返還要求大行進(大謝名)1967(昭和42)年頃

みんなで  
見に来てね♪



宜野湾市立博物館

〒901-2224 宜野湾市真志喜 1-25-1

TEL: 098-870-9317

■入館料: 無料

■開館時間: 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

■休館日: 毎週火曜日、祝日、年末年始 (文化の日、慰霊の日は開館)

